カイニョ倶楽部会報　第 27 号

平成１５年８月発行　発行者　砺波カイニョ倶楽部　代表幹事　柏樹直樹
事務局　富山県砺波市表町７－２５　電話　0763－33－6588　　天野一男建築工房内

次回、例会のご案内

「千光寺」の歴史と樹叢にふれ　少し掃除もする集い

■日時　**８月３０日（土）午前９時集合**　１２時解散（**雨天決行**）
■場所　千光寺（砺波市芹谷）℡0763－37－2323（**千光寺下の駐車場集合**）
■内容　①　９：００－10：００　境内の掃除（手袋持参）
②１０：００－１０：３０　千光寺樹叢の見学
③１０：３０－１１：００　休憩
④１１：００－１２：００　千光寺の歴史説明（住職と尾田武雄さん）
■服装　**清掃作業が可能な服装で、軍手持参。**
■会費　５００円（子供無料）

千光寺

弘法大師の願いで再興された、北陸で最古の寺院。銅像観音菩薩は奈良時代

（松任駅前「ふるさと館」）

手取川扇央部・吉田町の屋敷林を見る
２２名の参加で楽しく勉強

７月６日（日）、石川県手取川扇状地、扇央部の松任市吉田町の屋敷林を見学しました。午前中は、小雨混じりでしたが、２２名の参加者は、たくさんの励ましや心の糧を得て帰りました。

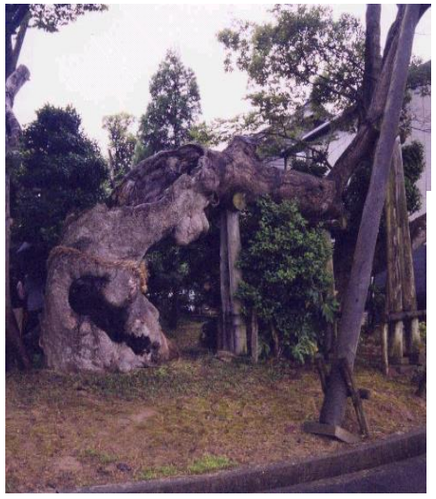
砺波地方以外の屋敷林にふれる倶楽部例会は、初めての試みで、砺波散村研究所と共催し、新藤正夫館長の指導をいただきました。

当日の見学内容を日誌風にまとめました。

１０時　松任市役所で、休憩・新庁舎前で記念写真を撮りました。庁舎敷地はゆったりと広く、ケヤキ樹林のエリアやタブ樹林のエリアがあり、将来は豊かな緑地公園になるように思われました

■歴史の古い宮と、表さん宅のケヤキに圧倒

10：10　吉田町（28 戸）の神明社（神田神社）の拝殿で、地区の宮総代６名の皆さんから、村の歴史、近年、本殿・拝殿などを新築したことについて説明を受けました。また、神社の樹叢・地域の大木の変化などの説明に加え、地域内を案内していただきました。この吉田町の神社は平安時代の初期にまつられた「ニギハヤヒノミコト」を主神としていること、石川県の中でも相当格式の高い神社であることが、この町の誇りとなっていることが、よく伝わってきました。



（ケヤキの古株）

（表さん宅のケヤキ）

社叢には、相当古いケヤキの大木に加え、何代目かわからない朽ちた株が参道横に保存されていること等、この集落の象徴となっていることの説明もありました。この吉田町を囲んでケヤキやエノキがありましたが、近年、伐採され、家々を包む大木はなくなってしまいました。各家の庭に、ウメやマツなどの中小木が入っていますが、大木は見られませんでした。

集落の南面に位置する表勝久さん宅のケヤキ４本は、集落の南西面からの目印となっている注目されるものでした。北面の神社の樹叢と対置した形で遠望すると吉田町がこのふたつの森で包まれているように見えました。

表さんのケヤキの最大木は、直径 1.2m、樹高 30m、その樹冠は、半径 30mと勇壮なもので、ケヤキが並んでいることで集落の南面の全てを包んでいるような相観でした。

主人の勝久さんは、「注目されるようになったケヤキだし、伐るわけにはいかんようになった。３代前が植えたものだろうし、特別に邪魔なものとは思わない。コンクリートがケヤキの根で割れるが又少し手直ししてやればいいと思っている」とケヤキとの共生をさり気なく説明してくださいました。

（ふるさと館の庭園）

■駅前の静寂な宿と若宮八幡宮境内

昼食は、松任駅前にある松任市「ふるさと館」でそれぞれ持参したにぎりめしで楽しみました。この「ふるさと館」の建物と「紫雲園」と名付けられている庭園を散策できたことは、大収穫でした。

金融、米穀などの豪商であった、吉田茂平邸を松任市が譲り受け「ふるさと館」として市民の憩いと安らぎの場に活用されています。

駅前一等地の大面積を今に残した昭和 50 年代当時の為政者の姿勢にただ敬服。その敷地は約 3,700 ㎡庭の石と池と水、それを包む樹木の厚い組み合わせの中には、街中心部の騒音はまったく聞こえないから不思議である。まさしく、「静寂の宿」というにぴったりの中味で安らぎを得ました。

午後からは、雨もおさまって、格好の遠足となりました。

今度の遠足での収穫は、ねばり強く樹木とつき合っていることと、土地の歴史を今に伝える情熱をそれぞれに生かしきることが大切だと感じたことです。

人を迎え入れる風景や風土（歴史）を砺波でどう維持し、地域の誇りとしていくのか、ひとり一人に問われているように受け止めました。

（若宮八幡宮の樹叢）

■参加者の感想

〈加藤悦夫さん〉

肩を寄せ合うような家並みを囲む集落林が、かつては全体にあったことが想像できた。今はその一部がケヤキの大樹として残っている。きっとこの姿は上空から見ると砺波の散村のように見えるだろう。向井潤吉が描いた民家に早月川沿いの伊折集落がある。これも４０年程で変わってしまっているように、砺波の散村もカイニョも絶えず変化していく。しかし、草木に包まれた住居の心象は、自然の中の人間として大きく変わらないのではなかろうか。

〈天野一男さん〉

訪れた集落の南方にある新興住宅団地で、北面側に松林がつくられ、防風対策がとられているようで、造成時にそれだけのスペースが確保されていることは、大いに学べることではないか。

〈高木美奈子さん〉

庭に昔のままの水路を生かしていることや、納屋の梁が手斧で、はつられ木目を浮かせていることは、遊び心もあり、木との付き合い方がゆったりしているように思った。

〈高多康弘さん〉

楽しい遠足だった。集落を囲む屋敷林があり、また、集落が点在する風景が珍しく、新しい発見だった。